

梅雨期の家畜衛生

石井敏雄

ジメジメした湿度の高い日が続くと、家畜に及ぼす影響は実に大きい。まず家畜に共通的な問題について述べたいと思う。

1、湿度

温度が高いうえに湿度が高ければ生理現象がうまくいかない結果、非常に蒸される感じをいただくことは人間同様である。特に鶏は汗腺がないので、体の表面からの水蒸気の発散が抑えられてしまう。育すうの場合にしばしば「むれる」という言葉を聞くが、「むれる」という現象は育すうの場合最も禁物である。この言葉の中には換気不良という状態の意味も含まれている。

湿度が家畜に及ぼす影響について試験成績はきわめて少ない。ウイルソン等は白レグの産卵鶏で試験を行ったが、72%の湿度の場合が最も著しい変化を示している。即ち鶏の呼吸、体温は温度の上昇とともに上昇し、100° Fの場合が最も環境が悪くなり、鶏の一部は死ぬほどであった。

高温、多湿は、いろいろな病原体や、かび類の繁殖を促がす関係上、病気の予防及び飼料衛生上重要であることは明らかである。

2、温度

家畜は寒さより暑さに弱い。家畜の繁殖率は低下し、鶏では産卵率は落ちる。家畜の最適温度は、55～65° Fである。

鶏の軟便も温度の上昇に起因していると思われるであろう。温度が75° F以上になると餌食いが悪くなり、逆に飲水量が増加して、糞とともに排泄される水の量が増加してくる。ここで軟便対策が問題となってくる。

鶏を除く家畜では、その水分は直腸から吸収されて、尿として排泄されるか汗となって外にでる。鶏ではその尿は尿酸の白い半固形分として糞と同時にでる。軟便の本体は、直接水分として直腸からそのままなのか、吸収されて薄い尿酸として排泄され

るのかわからないが、とに角軟便は水様便として排泄される。

軟便対策については養鶏試験場で発表されているとおりである。(本誌2～3月合併号14頁参照)

次に温度の変化である。梅雨期は連日雨が降りつづく場合もあるが時に晴れまをみる場合もある。このときの温度差は大きい。また家畜にも影響がある。

この場合鶏が最も敏感である。特に6月と9月は県下においては危険期に入れるべきではなかろうか。

3、不快指数

前に述べた湿度と温度との関係が人の身体に与える快、不快を表わしたものが不快指数である。高温でも湿度の高いときは、むし暑くてすごしにくい。梅雨期にはこのような日が多いわけである。

他に色々共通した要素もあるが紙数の関係で省略して、この時期に注意すべき病気あるいはその予防について述べることにする。

4、病 気

(1) ロイコチトゾーン病

この病気は養鶏家は充分承知していると思われるが、最近、特に昨年はその症状が参考書のとおりになくなってきたことである。他の病気と混合感染のかたちで現われてきていると思われる。

原因はニワトリヌカカという体長1mm位の小さい吸血昆虫が媒介している。ニワトリヌカカの発生は今までに調査したところ、県下では4月初めに南部で認められている。この病気の発生時期は6月頃からで多発期は7、8月である。

2、3年前には幼すうから中すうにかけて急に口から血をはいて斃死していた。そして斃死率も50～80%みられていたが最近では低下してきている。これは飼料中に添加剤を混ぜているからだろうと思われる。

予防としてニワトリヌカカに対することは目下研究中であるが、予防としては資料のなかにダダ

岡山畜産便り 1964.06

プリンとの混与が効果的であるが添加の割合がある。このときの割合は中すうでは 0.00005%で大すうおよび成鶏では 0.0001%であると岡山大学で発表されている。ニワトリヌカカの忌避剤については幾日も持続性のあるものは現在のところ認められていない。

(2) コクシジウム症

最近有力な予防策が見出され、予防薬品を添加した配合飼料では、被害を最小限にとどめることができる。

従来、幼すう、中すう期に血便を排泄し色性の経過を示した盲腸コクシジウム症は漸次減少し、かわりに大すう以降は発病も慢性経過をとる小腸コクシジウム症が問題になってきている。

(1) 予防の要点

- (イ) 移動時の消毒の徹底
- (ロ) 鶏舎内の換気に努める
- (ハ) 環境衛生に留意する
- (ニ) 予防液の使用

(2) 早期発見の要点

- (イ) 貧血により肉冠の色が褪色し、羽毛粗剛となる
- (ロ) 削瘦、胸筋の発育不全
- (ハ) 肉様便または淡緑色軟便の排泄
- (ニ) 脚弱

(3) 治療にはサルファジメトキシシンの薬剤が効果的である。

(3) ニューカッスル病

最近愛媛県に発生をみ、また香川県でも擬似症が発生したと公表されている。病原体はウィルスで法定伝染病、集団的に発生している。

(1) 予防の要点

- (イ) 予防注射の自主的励行
- (ロ) 環境衛生
- (ハ) 消毒の徹底

(2) 早期発見の要点

- (イ) 呼吸症状奇声、異常音の発声
- (ロ) 消化器症状 緑色の下痢便
- (ハ) 肉冠 暗紫色
- (ニ) 神経症状 脚マヒ、起立不能、翼下垂

(3) 治療 治療薬はない

(4) 予防薬の使い方

免疫期間	注射量	注射部位
六カ月有効	三二三日 三カ月令 三カ月令 成鶏	二カ月以上のひな及び成鶏注 ふ化後二カ月未満のひな大腿部筋注
一〇日	一〇〇cc	胸部筋注
四	〇五二cc	内臓注

(4) 流行性脳炎

毎年9月から10月にかけての分娩に死産（黒子）がしやすいものである。とくに初めて夏を迎えて分娩するものに多くでる傾向がある。この原因としては熱射病、日射病、あるいは中毒やそのほか熱の病気に罹った場合が考えられるが流行性脳炎も原因の一つと考えられる。

流行性脳炎の病原体はウィルスで、流行性脳炎に罹らないように予防することである。

予防の要点

- (イ) 予防注射の励行……6月から7月上旬までに実施
- (ロ) 吸血昆虫の駆除

流行性脳炎ウィルスが豚に侵入しても発病するものは殆んどないが、たまたま妊娠していると、胎盤にゆき、そこを通過して胎子に感染を起すわけである。豚の胎子はかなりひどい感染をうけるとみえて、ひどい感染をうけた胎子は死んでしまう。

(5) 皮膚病

豚の管理はよほど気をつけても不潔となりやすいのでいろいろの皮膚病に罹りやすい。

皮膚病の原因としては、外部寄生虫によることもあるが、その多くは湿疹で、これは管理の不良、栄養不良（寄生虫、ビタミンAの欠乏）などから起ることが多い。

湿疹の多発部位は耳根部で、初めは皮膚が赤く腫れ、かゆいので豚は体を物にこすりつけて毛が抜け、血がでるようになり、ついで痂皮（カサブタ）となる。（県普及教育課専門技術員）